

東北とは何か

—挫折, イメージ, そして現在—

田 中 史 郎

はじめに

1. 「東北」という呼称
2. 古代から近世の東北
3. 明治から戦前の東北
4. 戦後の東北
 - (1)経済社会の状況
 - (2)東北へのまなざし
5. 「3.11」東日本大震災
6. 総括と結論

はじめに

すでに東北を対象とした研究は少なくない¹⁾。民俗学や地誌学などでは古くから研究が進められている。また、2011年の「3.11東日本大震災」以降は、改めてそうした研究が脚光を浴びている。大震災からの復興を念頭においた研究もみられる。さらに、この大震災と東北の意味するものを根本的に問う試みもある²⁾。

もっとも、東北に関しては、通俗的な「イメージ」も張り付いている。東北に対する「まなざし」がステレオタイプ化しているともいえる。経済産業省関連機関による「東北のイメージについて」のアンケートによれば³⁾、東北に対するイメージとして、「気候風土」、「震災」、「食資源」が上位3位にあげられている。そして、「気候風土」には「豊かな自然」のほかに、「寒い」、「雪」などの言葉がイメージされる。また、上位ではないが、「田舎」、「訛り」、「過疎化・高齢化」、「人情味・親切」、「我慢強い」、「日本の原風景」などの言葉がイメージを表すものとしてあげられている。みられるように、東北には、一方では、「寒」、「田舎」、「過疎化・高齢化」などの近代イデオロギーからすればネガティブなイメージが付着しているものの、他方では、それにも拘わらず、あるいはそれ故に「日本の原風景」といったノスタルジーをそこに見いだすようなイメージも存在する⁴⁾。いわば両義性を秘めているともいえよう。

本稿においては、そうしたまなざしやイメージがどのように形成されてきたかを辿るとともに、

- 1) たとえば、赤坂憲雄 [2009] をはじめとした一連の研究を参照されたい。
- 2) 半田正樹 [2012], [2014], 大内秀明 [2012] を参照されたい。
- 3) 東北地方産業競争力協議会 [2014]
- 4) シスタルジーにかんしては、田中史郎 [2018] も参照されたい。

その意味や意義を現代においてとらえ返したいと考える。やや個人的なことを述べれば、東北に居住して以来、こうした問題は一度は自らに問いたい課題でもあった。おそらく、日本のどこに転居しようと、何某かの親近感や違和感を覚えることは常にあることは否定しがたいが、東北にはもう少し違った何かがあるように思われるのである。

1. 「東北」という呼称

東北とは、現代の行政区を前提とすれば、青森、秋田、岩手、山形、宮城、福島に当たる地域を指すことはいうまでもない。

しかし、これらの地域を「東北」と呼称するのは必ずしも古くからではない。地理的な範囲も若干は変化しつつ、日高見国（ひだかみのくに）、みちのく（道の奥）、陸奥（むつ）、奥州、奥羽などと時代とともに呼称は変わってきた。また、陸奥国は、奥羽山脈を挟んで東の陸奥と西の出羽に分けられることもあった。そして、明治前後には陸奥と出羽を意味する奥羽という呼称が広く用いられたが、この頃に「東北」という名も現れたという⁵⁾。また、廃藩置県以前のこの地域の呼称としては、先の陸奥（広義）は陸奥（狭義）、陸中、陸前、磐城、岩代に、そして出羽は羽後と羽前に分けられていた⁶⁾。このような呼称の変化にはこの地域の歴史が刻まれており、先のような東北のイメージもこうした呼称の変化に多少なりとも関係している。

では、どのような経緯で「東北」という呼称が一般的になっていったのか。ここで問題になるのは、その東北という呼称の成り立ちをめぐっては、かなり隔たりのある二つの説が存在することである。これらを紹介しつつ、検討しよう。

ここで二つの説とは、一方は、「東北」という呼称が普及したのには自由民権運動が大きく影響したと考える説（自由民権運動説）であり、他方は、明治新政府が奥羽越列藩同盟の諸国に対する処分のための建議書を作成する際に用いられたとする説（明治政府説）のことである。

前者は、米地文夫、斉藤隆男、今泉芳邦によって提唱されたものである⁷⁾。この自由民権運動説からみてみよう。この説によれば、東北という呼称はそれまでもあったものの、それは今日の東北六県のエリアではなく、関東や信越をも含む広い地域を指すものであったという。この広範囲の地域を京都（畿内）からみて東北と一括りにしていた。したがって、この広義の東北は、東北六県を含むものとはいえ、今日での東北を意味するものではないという。

では、今日の東北の呼称はどのように生まれたのか。その普及には自由民権運動が大きく影響したという。周知のように、戊辰戦争で奥羽越列藩同盟は新政府軍に敗北した。そこに参加した諸国は賊軍の汚名を着せられ、士族には政治参加が認められず、この地は政府が派遣した役人によって支配される状態が続いたのである。

5) 藤岡謙二郎 [1984] を参照されたい。

6) 羽後と羽前のように、「前、後」を冠した地名があるが、それは京都に対しての前後を意味することはいうまでもない。

7) 米地文夫、斉藤隆男、今泉芳邦 [1995][1996] を参考にした。

しかし、奥羽の地にも自由民権運動が湧き起こる。自由民権運動は、新政府に対する不平士族が蜂起した西南戦争に大きく影響を受けた運動だが、薩長による藩閥政治を批判して民選議院の設立を目指すものでもあった。そうした自由民権運動の活動家には奥羽出身者や奥羽を拠点とする政治結社が多数あったという。彼らは西南への対抗概念として「東北」を積極的に使い、東北を自由の地とすることや、東北から日本を変えていくことを喧伝した。そして、彼らが「東北七州自由党」（1881年）を名乗ったのが東北という呼称の嚆矢をなすと。ここで「東北七州」とは、先の陸奥、陸中、陸前、磐城、岩代、羽後、羽前を指すのであって、現在の東北六県と一致する。そして、以降、「東北改進黨」、「東北議政会」、「東北自由新聞」など東北を名乗る自由民権運動の結社などが多数輩出してくることになる。

要するに、戊辰戦争の敗北によって奥羽には未開の地というレッテルが貼られ、その政治参加も許されなかった。しかし、自由民権運動に積極的に関わった奥羽の士族や知識人は、西南諸藩（新政府）に対して「東北」という軸を打ち出し、これをアイデンティティとした。その呼称が広く現代まで引き継がれたという。もっとも、だからといって、東北は「未開の地」や「遅れた地域」、すなわち後進であるというイメージが払拭されたわけでない。しかし、こうして「東北」という呼称が根付いていったというわけである。

次いで、明治政府説をみてみよう⁸⁾。これは、岩本由輝によって示されたものであり、この説の最大の根拠は、薩長新政府の参与である木戸孝允（きどたかよし）の提出した建議書のタイトルが『東北諸県儀見込書』（1868年）であったことによる。すなわち、木戸は、戊辰戦争後の奥羽越列藩同盟に加盟した諸藩に対する処分に関する提起をしたが、その建議書のタイトルには、奥羽ではなく、「東北」と明記されており、これが東北という地域名の文字上での初現であるとする。また、県というのはその後に出される府藩県三治制にもとづき占領地など政府の直轄地に付される予定の行政単位である⁹⁾。

そしてさらに、今日の東北地方という呼称につながる東北は、要するに「東夷北狄（とういほくてき）」を約めたものであったと述べられている。古代中国において東方の未開国を「夷」、北方のそれを「狄」といったが、東夷北狄とは、東の未開人、北の野蛮人という意味であって、蔑称に他ならない。東北という呼称にはそのような意味が込められていたというわけである。

このような理解が成立すると、それと対をなす、「西戎南蛮（せいじゅうなんばん）」という言葉が気になる。いうまでもなく、西戎とは西の、南蛮とは南の未開人や野蛮人という意味であり、蔑称に他ならない。西戎南蛮を約めれば「西南」となる。だが、岩本によれば、この語の使われ方は微妙である。

すなわち、周知のように明治政府の中心は薩長によって構成されているが、それらの地域を「西南」とは呼ばなかった。しかし、後の西郷隆盛らの反乱を「西南の役」という。その「西南」には、

8) 岩本由輝 [1994] を参考にした。

9) 府藩県三治制とは、明治維新から廃藩置県までの間の地方制度。幕府の重要直轄地であった東京、京都、大阪などを「府」、その他の直轄地を「県」とし、また、大名の支配地を「藩」としてそのまま存続させたものである。

「西戎南蛮」の西南、つまりそのような敗者に対する軽蔑の意味が込められていたというわけである¹⁰⁾。

このようにみても、両者の見解の隔たりは大きく、さらに検討の余地があることを認めざるを得ない。しかし、ここで少なくとも明らかになったことは、東北という呼称は自然発生的なものではなく、また、時代的には明治の初頭に生まれたということである。そして、それには相当の政治的な背景があったということである。既にみたような、東北に対するアンビバレントなイメージの背景には、その深層においてこうした歴史的経緯があったのではないかと推量される。

2. 古代から近世の東北

東北という呼称には諸説があることが確認されたが、いずれにしてもそれは明治期という近代においてであった。しかし、それ以前であっても呼称はともあれ地理的な意味での東北の地が存在していたことはいうまでもない。また、人々の生活もあった。しかし、その呼称とともに、この地の位置づけには中央政権との関係が如実に表れている。

そこで、近代に至るこの地（東北）の事情を政権との関係で概観しよう。それによって、この地に対するまなざしやイメージが形成されてきた背景が垣間見られると思われる。

先史時代においては、青森県の三内丸山遺跡などにみられるように、当時の気候の温暖化を背景として一定の文明や文化の発展も認められている。当時は、朝廷との交流がすでに始まっていると考えられているが、支配服従関係とはいえなかったようである。交流という言葉がふさわしいのかもしれない。

しかし、古代に入ると、朝廷とこの地（東北）の諸勢力との関係は、古墳時代までの緩い地域的な交流や連合のレベルから、徐々に中央集権的な都と地方という関係に移行していった。奈良時代そして平安時代には、政権にとってこの地の民すなわち「蝦夷（えみし）」は武力に訴えてでも平定すべき対象となった。宮城県に多賀城（724年）を設置し、政治的軍事的拠点としたことは象徴的である。こうして、長期にわたって断続的に武力的な衝突が繰り返された。

だが、力による弾圧には当然ながら反発が生じる。カリスマ的な首長である阿弭流為（アテルイ）の登場によって、朝廷側は大苦戦を強いられることになったといわれる。阿弭流為の主導する蝦夷は、朝廷の兵力に匹敵するような軍事力を有していないものの、地域特有の森林や山、川などを利用して相手の死角をとる戦法に優れていた。他方、都で育った朝廷軍の兵士たちには当然にもこうした土地勘がない。そのため、朝廷側は圧倒的な兵数をもってしても中々攻勢に出られなかったと考えられている¹¹⁾。

10) もともと、東夷の「夷」とは弓を射ることの上手い民族という意味、北狄の「狄」とは本来は「羽でつくった舞い衣」の意味、西戎の「戎」は兵器の意味、そして南蛮の「蛮」は未開の意味であったという。貝塚茂樹 [1964]などを参照。いずれにしても、身のこなしに優れ、武具の扱いに長けた、しかし、未開の者達という意味であろう。

11) 当時の雰囲気を知るための参考として、高橋克彦 [1993] があげられよう。

しかし、こうした長期にわたる一進一退の攻防が継続するなか、朝廷側は征夷大將軍として坂上田村麻呂を送り込み、ついに朝廷軍の勝利(802年)を導いたとされる¹²⁾。この地の第1回目の「挫折」である。これがわれわれの知る歴史である。

以上は、政治的な闘争であり、何よりも朝廷側の勢力圏の拡大を意図したものだが、こうした背景には経済的事情も横たわっていた。すなわち、なにゆえ奈良時代から平安初期にかけて朝廷はこれほど長期にわたって東北地方の平定に力を注いでいたのかという問題である。

朝廷は文武天皇のもと、平城京に都を移す前に大宝律令(701年)を制定してから、律令国家の道歩んだ。しかし、その律令国家を支えるための重い税金に苦しんだ民衆が偽籍や逃亡を行うなどして税を納めず、朝廷の経済事情は非常に苦しい状況にあったといわれる。経済力に陰りが進み社会不安が増大してくるなか、聖武天皇は東大寺建立に着手する。仏教の力によって国を守る「鎮護国家思想」がその基盤にあったといわれる。その中心である大仏(東大寺、盧舎那佛像)を覆う金を外国から輸入して入手する予定だったが、それを東北に求める方向に変更したという。というのは、この頃に東北地方で金の鉱脈が複数発見されたからである。そうした背景のもとで、金の獲得が経済的な目的になっていったと考えられる。支配地域を拡大することによって、土地と民衆を支配下におき、その経済的な利益をもって財政を安定させようとしたと推測できよう。朝廷には、すでに政治的な勢力拡大の意図があったうえに、経済的な要因が加わったのである。

このようにして東北地方は武力によって結果的に平定されていくが、屈服させられた人々は俘囚(ふしゅう)として扱われ、一段低い人間と見なされていった。都からの距離の遠さ、そしてこうした敗北の歴史などから東北に辺境や未開のイメージが形成されていった。そうした東北へのまなざしやイメージは、古くはこうした時代から作られたのではないかと想像される。

しかし、こうしたイメージの形成とは裏腹に、東北に対してはやや異なったイメージも作られていった。都から遙かに遠く、また未開の地であるが故に、そうしたものへの憧憬のようなイメージも生まれてきた。

たとえば、当時の文化を代表する和歌においても、東北を読み込んだものは少なくない。「歌枕」(和歌に詠み込まれる名所や地名)として東北の地名が用いられ確立されていった。いうまでもないことだが、これらの歌人は実際に東北まで足を運んだわけではないにもかかわらず、こうしたことが生じたのである¹³⁾。

また、とりわけ東北では、松尾芭蕉『奥の細道』には特別の感があるが、そこでは当時の都で

12) 淳足柵(ぬたりのさく、647年、新潟市)や磐舟柵(いわふねのさく、648年、新潟県村上市)が建造されてから最終的に蝦夷征伐が終了(811年)したとされるまでの期間は、150年以上にも及んだ。

13) たとえば、山本陽史は、「都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関」(『後拾遺和歌集』、能因法師)あげ、概ね以下のように述べる。この和歌で、「白河の関」が都から遠いという本意を与えることによって、その後の歌人はこの本意を継承しつつ作歌することになる。周知のように「白河の関」は東北地方の入り口に過ぎないので、その北の陸奥ははるかに遠い地としてイメージされていく。こうした過程で、東北には、「まだ見ぬ何か」というイメージも形成されたというわけである。山本陽史[2018]

はずで失われた古い言葉や風俗を東北に求めるというスタンスが窺える。そうしたことはいわゆる専門家でなくても感じ取ることができる。もっとも、そうしたことは、一方では東北に対する憧れといった感情を喚起するとともに、他方では東北を辺境の地とするという認識も導くものでもあろう。今日に至る東北のイメージを構成するものがここでもすでに生まれているといえよう。

以上、雑ばくにみたように、東北に対するいわばアンビバレントな感覚や認識はこうした古い歴史にまで遡って考えるべき課題なのかもしれない。

3. 明治から戦前の東北

では、近代すなわち明治以降はどのようなようであろうか。

既述のように、近代のこの地すなわち東北は戊辰戦争での敗北という歴史から開始された。この地の第2回目の「挫折」といえよう。もともと経済基盤が弱かったこの地方の諸藩では、秩禄処分によって経済的な困窮へと追い込まれその窮余の策として「北海道移住」や「帰農」も広く行われた¹⁴⁾。

明治以降の富国強兵、殖産興業の大合唱の時代において、郡山盆地における安積疏水、宮城県野蒜（のびる）港、仙台の第二高等学校、岩手県の釜石製鉄所などの例外を除いて、政府は東北地方での大規模な投資や開発に積極的ではなかった¹⁵⁾。野蒜港が台風によって破壊された後も修復や代わりの港の建設はされず、鉄道のうち最初に敷設された東北本線は官営による国家計画としては行われなかった。こうして、以降も東北には都会への人、米、生糸の供給地という役割が定着していったのであり、いわゆる近代化の遅れはそのようにして形成された。こうしたなかで、後れた東北、つまりその後進性というイメージが定着していったことは否定のしようがない。

その象徴的なものが東北方言に対する評価ないし向き合い方である。富国強兵、殖産興業といった近代化を進めてきた政権は、経済的な近代化が進んでいないことは文化的にも後進的であるという評価を下してきた。東北方言に対する向き合い方は、まさにそのようなものであった。方言、といってもとりわけ東北方言を文化的な後進性を示すものと断罪し、これを矯正することを教育の一部とした¹⁶⁾。学校教育の場において方言の使用を誤りと見なす「方言札」まで登場し¹⁷⁾、徹底

14) 1882（明治15）年から1935（昭和10）年までの北海道移住者の出身県は、多い順に以下の通り。青森県、秋田県、新潟県、宮城県、富山県、石川県、岩手県、山形県、福島県、福井県。見られるように、上位9番目までに東北6県が入っている。平井松午 [2002]

15) 明治期のこうした政策は、当初は東北に「融和的」であったものの20世紀前夜、すなわち日本の帝国主義的政策とともに転換したという。半田正樹 [2014] を参照されたい。

16) 方言にかんしては、それを文化的な後進性と見なし矯正するという方針とともに、軍隊において挙国体制を構築するために矯正するという意図があったといわれている。軍隊においては、指揮命令系統が重要視されるが、その際に言語の統一は前提とされたといえる。そうしたことも方言排除に繋がった。

17) 方言札とは、標準語の使用を強制させるため、学校で方言を話した者に罰として首から下げさせた札をさす。沖縄や東北で、明治期から戦前を通してそうしたことは行われた。

的な標準語教育が強制された。方言は各地にあるが、東北方言がやり玉に挙げられたのには、こうした背景があるといえる。

ところで、第1次世界大戦以降は、終戦による戦後恐慌、関東大震災（1923年）、金融恐慌（27年）、世界恐慌（29年）、農業恐慌（30年）などにより、経済が大打撃を被った。とりわけ、世界的な生糸相場の下落や米の極端な豊作と不作は、東北の農業にとっては壊滅的な打撃を与えた。農家の「娘の身売り」などは疲弊の一端を表したものである。

そうしたなかで起こされたのが「2.26事件」（1936年）である。この事件は約1400名の兵士が決起したものであり、その中の兵士は必ずしも東北出身者が多かったわけではない。しかし、その背景には東北の目に余る疲弊に対する政府の無策への憤懣があったといわれる。

また、農家の次男以下の青年たちのなかには、国策に応じて大陸に新天地を求める者もいた。満州開拓団の出身地は長野県が最大だが、山形県（2位）、宮城県（3位）、福島県（5位）、秋田県（10位）なども上位を占めている。

戦前の政治や経済の状況が一体になって東北のイメージは形成されてきたのである。次いで戦後についてみてみよう。

4. 戦後の東北

(1) 経済社会の状況

知られているように、戦後の出発点は、国土面積がおよそ半分になり、鉱工業生産力は3分の1になった状況にあった。資源も外貨もないという段階から戦後が開始されたのである。

東北地方との関連でいえば、いわゆる北方領土を失い、北海道が最北になったことがあげられる。ここで北海道との対比でいえば、北海道はいわば新天地、フロンティアのイメージでとらえられることが多い¹⁸⁾。実態は先住の民がおりフロンティアではなく、また、北海道開拓を担った人々のかなりの部分は東北出身者であったにもかかわらず、かなり違ったイメージでとらえられることが多い¹⁹⁾。

ともあれ戦後のこのような状況を前提として、政府によって早くから国土開発が構想された。「国土総合開発法」（1950年）の制定がそれである。そこでは、①土地や水などの天然資源の利用、②水害などの災害の防止、③都市と農村の適正な規模と配置、④文化と観光にかんする資源の保護や施設の配置、などが目標として掲げられている。

そして、この「国土総合開発法」を前提として「特定地域総合開発計画」（1951年）が策定さ

18) しばしば北海道を形容する言葉に、「雄大」「廣大」などがあげられる。また、東北の「暗さ」に対して「明るさ」は、北海道がいわばフロンティアとして見られることに起因しているのではないか。

19) 東北と北海道についての位置づけについては、定説があるわけではない。たとえば、両者を「植民地」と同一に位置づける説もあるものの、異なる説もある。前者を「半封建的土地所有」とし、後者を「資本主義的な植民地」と位置づける説、そして、前者を「半周辺」とし、後者を「周辺」とする説などである。佐々木伯朗 [2017] を参照されたい。

れた²⁰⁾。この計画の多くは多目的ダムの建設を軸として、治水、発電、農業用水、食糧増産などを目的とする河川総合開発を中心するものである。東北地方では、十和田、北上、仙塩、阿仁田沢、最上、只見が全国21の指定地域に含まれている（この中で、仙塩はやや例外的に鉱工業に資するものという位置づけがなされているが）。「特定地域総合開発計画」は、簡略化すれば、自然エネルギー立地型と地域資源活用型の政策が軸をなすといえる。というのも、当時の状況においては、①外貨の不足により、鉱物資源や石油（エネルギー）の輸入が困難であること、②また同様に資金不足で、生産の再開を地場の企業に委ねる以外に道がないこと、そして、③政治的には、戦後改革の精神により、地方分権が指向されていたこと、などがこの「計画」の背景にあるといわれる²¹⁾。

しかし、この「計画」は未達成に終わったと評価されている。というのは、日本を取り巻く状況とそれに伴う日本経済の状況が大きく変化したからである。それはいうまでもなく朝鮮戦争の勃発とそれによる特需の発生に他ならない²²⁾。特需の規模に関して確認しておく。朝鮮戦争が激化したのは50年からのほぼ3年間であるが、その間の特需の総額は約24億ドルに達した。ちなみに、当時の通常の輸出額が1年で約10億ドル程度であったので、これがいかに大きいものであったか明白である。

この特需によって、日本は外貨を獲得するとともに、工業の立直りの契機をつかむこととなった。特需景気とともに1953年頃には経済は戦前の水準に回復し²³⁾、そして高度経済成長に繋がっていったことは周知の通りである。

それに伴って政策のスタンスに変化が見られることになった。政策の重点が、①業種としては農林業や軽工業から重化学工業へ、②地域としては地方から都市へと移されていった。それまでの地域政策から産業立地政策へと政策の軸がシフトしたともいえる。

そして、当時の池田勇人総理によって提唱されたのが、「国民所得倍增計画」（1960年）である。そこで「太平洋ベルト地帯」構想が宣揚されたが、これは1950年代中葉から始まった高度経済成長路線を追認すると共に、それをさらに推進する計画であるといえる。太平洋ベルト地帯構想は、この地域の工業開発を重視し重点的に投資をする政策だが、それ故にその他の地域から強い批判を受けた。こうした公共投資の地域配分の片寄りをどう是正するかが、当時の地域政策に求めら

20) 当時、全国総合開発計画、地方総合開発計画、都府県総合開発計画、そして特定地域総合開発計画の4つの総合開発計画が構想されていたものの、具体的に策定されたのは、本文で示したように、特定地域総合開発計画のみであった。また、全国総合開発計画は後述するように、「開発法」の12年後に策定されている。岩本由輝 [1994]

21) 宮本憲一、中村剛治郎、横田茂 [1990]

22) 特需とは、特殊需要 special procurement の略だが、この取引を国際収支上で「輸出（貿易）」ではなく「貿易外勘定」に計上したのでそのように呼ばれることになった。

23) 「もはや戦後ではない」は、『経済白書』（1956年）に書かれた一節で、流行語にもなった。しかし、このフレーズは、後に誤解もされた。誤解というのは、この語を「戦後の困難な時期が終了し未来は明るい」という風に受け取ることである。しかし、正しくは、「今まではいわばマイナスからの復興であり成長の伸び代があったが、戦前の生産水準にまで回帰してしまった以上、今後は困難な状況が生まれるだろう」といういわば警告的なものであった。しかし、その後の高度経済成長は、この「誤解」を「正解」にしたといえよう。

れた。こうした背景もあって、「全国総合開発計画」（一全総、1962年）が示された²⁴。そこでは、「地域間の均衡ある発展」が基本目標として掲げられていたが、それは開発の地域的不均衡や公害などの問題がすでに発生しつつあることを背景としていた。この方向を発展させたものとして、「拠点開発方式」が打ち出され、15地域の「新産業都市」（62年）も制定された。しかし、それによって「地域間の均衡ある発展」がもたらされたとは言い難い。むしろ、太平洋ベルト地帯への集中はより顕著になっていったのである。

では、この「国民所得倍増計画」や「一全総」は東北にとってどのような意味をもつものであったか。この過程で、いわゆる「エネルギー革命」と呼ばれるような状況の変化が生じたことが大きく影響した。すなわち、石炭から石油へと主要エネルギーが転換されていったのであり、それはエネルギーの国産から輸入への転換でもあった。地域の自然エネルギー資源による開発という構想は水泡に帰し、東北開発もその例の一つとなった。「中心-周辺論」的にいえば、東北は周辺に位置づけられていった。東北地方には、米穀はもちろんのこと、林業では能代（秋田県）の杉、鉱業では釜石（岩手県）・本吉（秋田県）・小坂（秋田県）の銅・錫・金、八橋（秋田県）の石油などもあったが、それらは重要視されなくなっていった。東北には、多彩な産業ではなく、「米」への特化政策にみられるように米単作が奨励された。これは、食料提供とともに、「集団就職」や「出稼ぎ」にみられるような労働力の提供に繋がっていった²⁵。高度成長期における、都市と農村、工業と農業という関係のなかで後者の一極を東北が担うことになったといわざるを得ない。都会-田舎図式が鮮明になってきた。この地の第3回目の「挫折」である。

しかし、こうした関係は高度成長の終焉とともに見直される機会があったと考えられる。すなわち、70年代の二度の石油危機を契機として高度成長は終焉したが、そこには二つの選択肢、二つの方向性があったことを強調したい。輸入に頼らざるを得ない原油の価格の大幅な上昇、また高度成長の負の側面である公害や地域の疲弊の発生という現実直面せざるを得なくなったが、そこには二つの選択肢が存在したのである。

すなわち、その一つは、各地域に賦存している自然・再生可能エネルギーを基礎とし、それを利用した分散型の地域産業の復興の方向であり、他の一つは、原子力エネルギーの利用にみられるような大規模産業の維持の方向である。しかし、歴史的な結果的としては、後者が選択されたといわざるを得ない。東北の人口規模は8%程度であるにもかかわらず、原発はその40%が東北に立地している²⁶。高度成長が終焉を迎えているにも拘わらず、いわばその惰性が継続したままであった。

24) 全総はその後、「四全総」（1987年）まで継続したが、5回目の「21世紀の国土のグランドデザイン」（1998年）はあえて「五全総」とは明記されなかった。

25) 農業は、食品の生産に限ってみても、穀物、野菜、果実、食肉など、本来多彩であるが、その中で米作は二度の集中的繁忙期を除けば、人手がかかれないといわれる。つまり、米作と出稼ぎとは相補的な関係になっているのである。

26) 原発が東北に集中しているのには理由がある。財政的に厳しい自治体は、「電源三法（電源開発促進税法・特別会計に関する法律（旧電源開発促進対策特別会計法）・発電用施設周辺地域整備法）」による交付金や「固定資産税」の税収、各種の「寄付金」に頼らざるを得ない現実があるからだ。

(2)東北へのまなざし

こうした高度成長そしてその終焉は、人々に様々な感情を呼び起こし、そこには高度成長の恩恵に乏しかった東北の状況が微妙な形で絡まってくる。戦後の過程を通じて、東北に対するイメージは、冒頭で示したようなアンビバレントないし両義性を秘めたものとして形成されてきたのである。

高度成長期を通して、生活の向上とともに娯楽も普及した。映画やレコード、ラジオ、テレビも日常のものになっていった。やがて、レコードはCDになり、ラジオもFM放送が加わり、何よりもテレビは急速に普及するとともに、カラーテレビに移行していった。そうした中で、もっとも大衆のイメージを喚起するものはラジオやテレビから流れる流行歌であるといっても過言ではなかろう²⁷⁾。数々の国民的な人気を博する歌手も誕生した。そうした観点から、この時代を考察してみよう。

高度成長とともに、都会-田舎図式が鮮明になってきたことは既にみた。とりわけ東北ではその図式が当てはまった。そうした中で、田舎(故郷)から東京に行った家族や恋人を残されたものが謳う流行歌が登場した。たとえば、青木光一「早く帰ってこ」(1956年)や、やや時代は新しくなるが松村和子「帰ってこいよ」(1980年)などをあげることができる。また、反対に都会暮らしの者が田舎を思い謳う流行歌も少なくない。春日一郎「別れの一本杉」(1955年)、伊沢八郎「あゝ上野駅」(1964年)、北島三郎「帰ろかな」(1965年)などがあげられる。やむなく都会に出て行かざるを得ない半面、都会には期待もの無いわけではない。また、そこには種々の希望と不安がついて回る。そうしたときに都会-田舎図式を前提とした歌詞が受け入れられるとともに、その場合の田舎の象徴が東北であったといっても過言ではない。

また、高度成長期においても挫折はつきものである。そして、高度成長期の終焉以降はそうした挫折はより拡大したと想像できる。そうした状況を反映して、傷心や傷心の旅をテーマにするような流行歌も数多く現れた。たとえば、小林旭「北帰行」(1961年)、朱里エイコ「北国行きで」(1972年)、都はるみ「北の宿から」(1975年)、石川さゆり「津軽海峡冬景色」(1977年)、山本譲二「みちのくひとり旅」(1980年)、森昌子「哀しみ本線日本海」(1981年)、細川たかし「北酒場」(1982年)など数多くのものがある。

タイトルや歌詞には、「みちのく」、「北国」、「津軽」などのような東北をあらわす歌詞が多数ちりばめられているとともに、「寒さ」、「吹雪」、「海鳴り」といった言葉も多数入っている。なぜか、傷心の人々は北方や東北に向かう。東北を旅したり、実際にはそうせずともそれを想像したりすることで、自らを省みたり、また未来につなげようとしたといえる。そうした感情に東北

27) 高度成長とその終焉を迎えた、1950年代から80年代は歌謡曲の時代ということもできる。長い戦争時代の抑圧から解放されるとともに、テレビがそのエネルギーと共伴した。また、それは昭和(戦後の)ともほぼ重なる。この時代の大衆のイメージを流行歌に求めた理由である。山本陽史 [2013] から示唆を受けた。また、それ以降についていえば、それはもはや大衆的な流行歌の消滅した時代であると図式化できる。サブカルチャーをどうとらえるかは定説があるわけではないが、興味深い。宮沢章夫 [2014] を参照されたい。

はきわめてふさわしいものと思われている。実際に、多くの人々が東北を旅行したとはいえ、また東北旅行を意図したとは限らないが、東北というイメージがそれにふさわしいものと思われているのであろう。

さらに、東北に「古き良き日本」のようなものを求める楽曲も多々ある。たとえば、千昌夫「北国の春」(1977年)、山口百恵「良い日旅立ち」(1978)、吉幾三「津軽平野」(1979年)などはこうした中に含まれる。必ずしも傷心から癒やしを求めるものではないが、何か精神の支柱となるようなもの、言い換えれば、「ふるさと」のようなものが東北に求められているといえる。「ご当地ソング」などといって、各地の地名入りの流行歌もそれぞれの地域に存在するが、以上にあげたような位置づけが可能なのは多くは無いのではないか。

みられるように、大衆に受け入れられた東北のイメージは、あるいは東北へのまなざしは、このようになものであったといえよう。

5. 「3.11」東日本大震災

高度経済成長の終焉の後、いわゆる安定成長の時代に入るが、その結末がバブル景気とその破綻であった。その後は、長期にわたり文字通り「ゼロ成長」時代を体験することになる。そして、やや景気の上向いた2008年にはリーマン危機にさらされた。それによって、GDP成長率がマイナス5%を下回るといって戦後最悪の異常事態に至った²⁸⁾。

そして、この事態からやや回復の状況にさしかかった2011年3月11日に、あの東日本大震災が発生した。地震、津波、そして原発事故に見舞われたことはいままでもない。その被害は甚大であった。1995年に発生した「阪神淡路大震災」と「東日本大震災」比較すると、たとえば、死亡行方不明者は前者では約6千500人であるのに対して後者では約2万人、被害額は前者では約10兆円弱であるのに対して後者では約21兆円であり、これだけを見てもその被害規模の大きさが明らかである。それに加えて、収束とはほど遠い原発事故の現状がある。政府と東電は廃炉費用を当初は11兆円だとしていたものの、2017年には22兆円に修正した。また民間のシンクタンクではその額は、50～70兆円のぼろと試算している²⁹⁾。

そうした状況のもとで、ボランティアに参加した人々も多く、震災発生から2017年末までに延155万人以上の参加があった³⁰⁾。また、国内外からの義援金も3千800億円を上回る金額に達している³¹⁾。被害もそれに対する支援も莫大であったことはいままでもない。

このような大きな災害と事故、それに対する多くの支援、こうした事々を通じて、東北に対するまなざしやイメージに何らかの変化が生じたのだろうか。本稿の関心からすれば、重要な論点

28) 戦後の景気循環、とりわけリーマン危機およびそれ以降の経済事情にかんしては、田中史郎 [2018] を参照されたい。

29) 日本経済研究センター [2017] を参照されたい。

30) 全国社会福祉協議会 [2018] を参照されたい。

31) 内閣府 [2018] を参照されたい。

になるが、その議論の前に幾つかのことを述べておきたい。

その第一は、こうした災害と事故にかこつけて、いわゆる「ショック・ドクトリン」といわれるような政策が展開されてきた点である。ショック・ドクトリンという言葉は、ナオミ・クラインの著書の名前を通して知られるようになった。ショック・ドクトリンを日本語に直せば、災害便乗型政策ということになるが、そうしたことは実際に起こっている。

かつて阪神淡路大震災の際に、「神戸医療産業都市構想」の名のもとに神戸市長田区の昔ながらの商店街を復旧させずに、大型ショッピングモールや高層マンションが建てられたことは知られている。東北でも、水産特区の設定や大型ショッピングセンターの誘致、そして巨大な防潮堤の建設などもそうした類いのものといえよう。莫大な復興予算が、被災地とは関係のない事業へ行政の手によっていわば横流しされているケースも多々ある³²⁾。

第二に、しかしそうしたことともに、「災害ユートピア」と思われる事々も生まれている。この言葉は、レベッカ・ソルニットの同名の書名から流布した。災害ユートピアとは、地震や台風などの大災害などが発生すると、被災者や関係者に連帯感や社会貢献意識が高まり、いわば理想的ともいえるコミュニティが生まれる現象を指すが、そうしたことも東北ではしばしば確認された。

たとえば、既にみたような多数のボランティアの結集、あるいは被災者同士の助け合いや秩序だった行動などは至る所でみられた。確かに、災害ユートピアの高揚は時間の経過とともに薄らいでいく。いわゆる日常に戻っていくわけだが、しかし、そこには様々な何かが生まれていく。それは可能性であるとともに、現実でもある。

ここで、東北における試みを紹介しよう。単に個別事例を超えて提起するものが多い³³⁾。

その一つは、山形県置賜地域の「置賜自給圏」の試みである。この構想は、山形県南部の八市町（米沢市、南陽市、長井市、高畠町、川西町、小国町、白鷹町、飯豊町）から構成され人口約21万人におよぶものだが、そこでは、生活に必要な資源や素材を、置賜地域の森や川や田畑に頼ることで、生活全体の地域での自給を高めながら、地域社会の持続を実現しようとする試みである。また、それによって地域住民の生活する地域コミュニティを創造するというものである。具体的には、①ケミカル農業を批判するとともに、その運営方式としては「家族農業か企業農業か」の二項対立を超えて農地を開放する仕組みを構築すること、また、②地域の農業を軸として、自給的な生活圏の形成を目指すこと、そして、③エネルギーにおいて、木質バイオマス発電や小水力発電などを組み合わせ、エネルギーの地産地消を追求すること、というような内容が示されている。

もう一つは、岩手県紫波町の「オガールプロジェクト」の試みである³⁴⁾。紫波町は、農業が主

32) 「NHKベシヤル東日本大震災 追跡、復興予算19兆円」(2012年)は、この問題を最初に報道したことで、話題を呼んだ。

33) 二つの例とも、半田正樹[2018]を参考にした。

34) ちなみに、オガールとは、この地域の方言で「大きくなる、成長する」という意味の「おがる」と、フランス語で役を意味する「ガール」の合成語という。

産業で人口約3万4000人である。町は、2000年6月に「新世紀未来宣言」を発表し、「100年後の子どもたちに紫波の環境をより良い姿で残す」ことを目指している。そのような目標のもと、中心的施設の「オガールプラザ」をセンターとして活動が進められているという。とりわけその中心に位置するのは「情報交流館」の中の図書館である。いわばどこにでもある無料の公共施設にすぎない図書館だが、そこに利用者や訪問者を惹きつける特徴をもたせることによって、オガールプラザ内の商業施設も含めた他の施設に人々を誘い込む効果を上げている。ここには図書館とともに、子育て支援センター、民営の産直販売所、カフェ、居酒屋、クリニック、学習塾などであり、これらのほとんどは県内の事業者がテナントとなっているという。町の逼迫した財政により開発が頓挫していた町の中心部を再活性化されることによって、町全体の底上げを図ろうというプロジェクトに他ならない³⁵⁾。

いずれも、疲弊しつつある「地域」において、自然に支えられながら人間の営みを持続させる地域循環型の地域社会の創設（再創設）という意義を秘めているものと思われる。

ところで、紹介したような地域の試みは、おそらくは各地にすでにありまた生まれつつあるように思われる。また、3.11大震災を一つの契機として生まれたもの少なくないであろう。

その際に、大きな問題となるのは電力などのエネルギー問題であった。食の地産地消をはじめとする地域作りはすでに各地でなされているものの、エネルギーの地産地消は難しいものであった。これまでは、電気に代表されるエネルギーは、スケールメリットが大きく働くもので、地産地消には不向きなものだと常識的に考えられていた。しかし、3.11大震災以降に各地で導入された小規模の発電はそうした常識を打ち破るものである。

各地の太陽光や風力、小型水力、バイオを利用した発電はよく知られている。ここでは、福島市土湯温泉のバイナリー発電について若干紹介しよう³⁶⁾。バイナリー発電は別名温泉熱発電ともいわれるように、高温の水蒸気でタービンを回すのではなく、熱水で低沸点媒体（比較的低温で沸騰する物質、たとえばペンタン）を用いてその蒸気でタービンを回す方式のものである。多くは、小型発電である。この方式は必ずしも水が沸騰する高温を必要としないので、温泉のあるような所では各地で立地の可能性がある。土湯温泉では、この方式で発電し、発電後は若干温度の低下した温泉水を温泉街に供給している。

技術的にはこのように興味深いものだが、じつは、より難問は、①地元の合意を形成すること、②資金を調達すること、そして、③各種の許認可を受けることであったという。つまり、こうしたプロジェクトでは、一方で技術可能性の問題があるが、他方では様々な社会や制度的な問題が横たわっている。むしろこうした技術以外の問題の方に課題がありそうである。

みられるように以上のような例は、いわゆる近代的な巨大プロジェクトではない。その意味で後進性を払拭する方向性にもない。むしろ、その方法は既存の自然や人間関係を前提としてまた

35) その際に用いられた手法が、公民連携（PPP:Public Private Partnership）といわれるものであるが、これについては、今後とも推移を見守る必要がある。

36) 千葉訓道 [2018] を参考にした。

それを半ば肯定的に理解しながら進められている点に特質をみいだすことができる³⁷⁾。コミュニティの創成や合意の形成にはこうしたことは不可欠なことであろう。

そうだとすると、これまで東北に向けられてきたまなざしやイメージに、何かの変化が起こりうるのであろうか。繰り返し述べてきたように、東北に対するそれらは古くからアンビバレントなものであった。一方では何らかの意味での後進性のレッテル貼りであり、他方ではそれにも拘わらず、あるいはそれ故に存在する何かに対する憧憬の念であった。そうだとすれば、こうした試みは、それが成功しても、少なくともいわゆる近代化を目指すものではないので、相変わらず後進性のレッテル貼りで終わるのか。

おそらくそうではなかろう。むしろこうした試みは近代を超出するものとして認められるであろう。また、そうだとしたらそれは東北という地域に留まるものではないことも認識されるであろう。つまり、一地域の細やかな試みは、その空間と近代という時間を乗り越えるものというまなざしを受けるのではなかろうか。

これまで東北は3回の「挫折」を余儀なくされたという歴史を持つが、「3.11」以降に生まれつつある様々な試みは、東北に対するまなざしとイメージをどのように変えるのか。それは、実は東北の歴史と現状を多くの人々がどのように考えるかにもよっている。

6. 総括と結論

これまでの展開を総括し、若干の結論を示したい。

何ら疑いなく使用している「東北」という用語法は、そもそも必ずしも古くから自然発生的に用いられたものではなかった。こうした点を脳裏に刻みながら、この地（東北）に対するまなざしやイメージを古代から辿ってみた。

先史時代からこの地には人々の生活があったことは遺跡が語っているが、そのような人々と中央との関係は明確ではない。少なくとも、明確な主従のような関係は存在しなかったようだ。

しかし古代に入ると、この地の朝廷との関係は緊張を帯びることになった。朝廷にとっては、この地すなわち蝦夷は武力を持ってしても平定すべき地とされた。それは一般的に勢力を拡大するという以上の意味合いが存在したからだ。蝦夷には金の鉱山があり、それは朝廷にとって魅力的なものに他ならなかったのである。こうして、奈良時代、平安時代に至って、この地は軍事的に敗北を余儀なくされた。第1回目の「挫折」の歴史といえよう。

そうしたこともあり、この地には一段下の地位が与えられたのである。都からみてはるかに遠く、まさに辺境の地とみなされたといえる。しかし、この辺境の地にはアンビバレントな感情が

37) 半田正樹 [2018] は、内山節 [2015] を援用して、日本の共同体は人間と自然を含めた自治である点で、ヨーロッパの共同体における自治とは異なる点に特徴があることを述べている。こうした見解は、阿部謹也が提起した「世間学」に通底する問題提起ではないかと思われる。田中史郎 [2009] も参照されたい。また、河村哲二 [2012] は、各地の「字・大字」レベルの生活圏の意義を強調している。この提起も示唆に富む。

移入された。一方では、単に地理的ばかりではなく、文明や文化としても辺境とされたが、それにも拘わらず、あるいは故に、それはある種の憧憬の対象ともされた。当時の和歌などによってそうしたことが窺える。そして、このようなイメージは江戸期にまで続いたといえる。このように理解できるとすれば、この地すなわち東北に対する現在に至るイメージの原型がすでに成立していたともいえよう。

その後、日本は明治期をむかえることになるが、それには戊辰戦争というこの地にとって忘却できない歴史がある。戊辰戦争で奥羽越列藩同盟は敗北し、この地は第2回目の「挫折」を味わうことになった。そうであるが故に、いわゆる近代化から取り残され、単に経済的ばかりではなく、文化的にも後進の地というレッテルはより強固になったといえる。たとえば、東北方言に対する評価をみれば明らかであった。そして、この時代に政治的な背景を伴いながら、「東北」という呼称が成立したのであった。

時代は進み、先の大戦での敗戦と戦後改革の時期をむかえる。全国的に戦災の被害は大きく、復興には地場の資源や産業を以てする他はないという認識のもと、国土総合開発法が制定された。しかし、この政策の方向は、朝鮮特需とそれを契機とした産業の回復によって大きく修正されることになった。そして、高度経済成長路線が既定のものとなった。地域としては地場から太平洋ベルト地帯へ、産業としては農業から重化学工業へ、そしてエネルギーは石炭から石油へと産業や経済の軸が変遷していった。その後、石油危機もありこの方向の転換可能性が無くはなかったが、そうしたことは顧みられなかった。東北は、また近代化から取り残されることになった。第3回目の「挫折」といえる。それゆえ、この延長線上に着想された原子力発電所が東北などに多数建設されたことは周知のことである。

冒頭でみた東北に対するまなざしやイメージはこの頃に最終的に出来上がったといっておかろう。ここでその東北に対するイメージを確認すると、それは両義性を持ったもの、あるいはアンビバレントなものであった。当時の流行歌などを素材にすると分かりやすい。やはり、様々な意味で辺境の地というイメージが引き継がれる一方で、高度成長とそれ以降の急速な近代化によって失われた何かを東北に求めるというイメージも存在していたのである。

さて、時代はさらに進む。大きな分岐点になる可能性は「3.11東日本大震災」にある。大震災では、まずは地震と津波によって莫大な被害が発生した。その瓦礫をみると、家屋の他には各種の電化製品と自動車が山をなしていたことが思い出される。その瞬間、家電と車に代表される近代化された生活に対して何らかに違和感をもった人々も多かったのではないか。それに加えて、福島県を中心とした原発被害は言葉に尽くせないほどのものになった。いうまでもなく、原発事故は現在も進行中であり、けっして過去形で済まされるものではない³⁸⁾。それに対しても様々な問題や疑問を感じた人は多かろう。

そうした中で、東北各地では新たなコミュニティを創設する試みや小電力発電を追究する試みはすでに始まっている。何らかの意味で「災害ユートピア」のようなものが継続しているともい

38) 原発問題にかんしては、田中史郎 [2018] を参照されたい。

える。あるいはこれらを「おだやかな革命」と称することもできるかもしれない³⁹⁾。そして、これらの試みは、単に一地域のことでなく、また単に一時的なものでもない。具体的な事々はあくまでもローカルで生じているが、その内実はむしろ普遍的なものを内包しているといえよう。東北の地は、かつて3回の「挫折」を余儀なくされたが、今回の分岐点はそれらを超える内実をもっているのではない。

以上のように総括できるとすると、「東北とは何か」という問や、東北に対するまなざしやイメージ如何という問題に一定の方向性を持った答えらしきものを考えることは可能ではないか。やや繰り返しになるが、それは、東北のこうした歴史と現在をどのように理解するかにもかかっているとと思われるのである。

文献

- 赤坂憲雄 [2009] 「東北学／忘れられた東北」 講談社
- 阿部謹也 [1995] 『「世間」とは何か』 講談社現代新書
- 岩本由輝 [2009] 『東北開発120年』 刀水書房
- 内山節 [2015] 『共同体の基礎理論』 農文協
- 大内秀明 [2012] 「岐路に立つ3.11震災復興－文明の大転換を迎えて－」, 『3.11から一年－近現代を問い直す言説の構築に向けて－』 御茶の水書房
- 大内秀明, 吉野博, 増田聡 [2018] 『自然エネルギーのソーシャルデザイン』 鹿島出版会
- 大内秀明 [2018] 「地域循環型社会としての新たなコミュニティの創発」, 大内秀明, 吉野博, 増田聡 [2018] 所収
- 貝塚茂樹 [1964] 『中国の歴史』 (上) 岩波新書
- 河村哲二 [2012] 「国民国家日本の「二重の危機」と再生への展望」, 『3.11から一年－近現代を問い直す言説の構築に向けて－』 御茶の水書房
- 全国社会福祉協議会 [2018] 「東日本大震災ボランティア活動者数の推移」
- 高橋克彦 [1993] NHK大河ドラマ『炎立つ』, 原作は, 講談社文庫など
- 田中史郎 [2009] 「「世間」概念の二重性－阿部謹也「世間論」を検討する一」, 『世間の学』 日本世間学会, vol.1
- 田中史郎 [2012] 「東北復興の視座」, 『人文社会科学論叢』 宮城学院女子大学人文社会科学研究所, 第21号
- 田中史郎 [2018] 『現代日本の経済と社会』 社会評論社
- 田中史郎 [2018] 「今、なぜノスタルジーなのか－社会現象としてのノスタルジーを考える－」, 『ノスタルジーとは何か』 翰林書房
- 千葉訓道 [2018] 「ご当地エネルギー事業の現状」, 大内秀明, 吉野博, 増田聡 [2018] 所収
- 東北地方産業競争力協議会 [2014] 「「東北」の強みを考えるアンケート調査まとめ結果について」
- 内閣府 [2018] 「東日本大震災に係る日本赤十字社等義援金配付状況 (平成30年11月30日現在)」

39) 「おだやかな革命」とは、渡辺智史による同名の映画 (2018年) のタイトルである。

- 日本経済研究センター [2017] 「事故処理費用は50兆～70兆円になる恐れ」 <https://www.jcer.or.jp/policy-proposals/20180824-13.html>
- 半田正樹 [2012] 「東日本震災・原発危機－「東北」萎縮からの解放にむけて－」, 『3.11から一年－近現代を問い直す言説の構築に向けて－』 御茶の水書房
- 半田正樹 [2014] 「地域からの視点『東北』の再定義のために－「3.11」の歴史の意味－」, 『変革のアソシエ』 第16号, 社会評論社
- 半田正樹 [2018] 「地域循環型社会としての新たなコミュニティの創発」, 大内秀明, 吉野博, 増田聡 [2018] 所収
- 平井松午 [2002] 「近代日本における移民の創出過程と多出地域の形成－北海道移民と梅外移民との比較から－」, 『歴史地理学』 歴史地理学会, 44-1
- 藤岡謙二郎 (監修) [1984] 『東北地方』 大明堂
- 古川 美穂 [2015] 『東北ショック・ドクトリン』 岩波書店
- 宮沢章夫 [2014] 『NHKニッポン戦後サブカルチャー史』 NHK出版
- 宮本憲一, 中村剛治郎, 横田茂 [1990] 『地域経済学』 有斐閣
- 山本陽史 [2018] 「なぜ傷ついた日本人は北に向かうのか?－日本人にとっての東北のイメージ－」 第39回 世間学会資料
- 米地文夫, 斉藤隆男, 今泉芳邦 [1995] 「近代国家形成過程における地名「東北」」, 『研究年報』 岩手大学教育学部, 第55巻第1号
- 米地文夫, 斉藤隆男, 今泉芳邦 [1996] 「地名「東北」と東北振興論および郷土教育」, 『研究紀要』 岩手大学教育学部教育実践研究指導センター, 第6号
- ナオミ・クライン (幾島幸子ほか訳) [2011] 『ショック・ドクトリン』 岩波書店
- レベッカ・ソルニット (高月園子訳) [2010] 『災害ユートピア』 亜紀書房

